

いろいろ  
使える!

# 九州災害履歴情報 データベース



地震 津波・高潮 火山 風水害

九州における災害履歴の情報公開サイトです



過去に九州で起こった災害の  
情報や文献が900件以上  
掲載されています!

子供たちが作る  
防災マップの素材として  
活用できます



地域にある災害碑や  
被災時の史跡をめぐるなど、  
災害地の訪問に活用できます



地域で起こった  
災害がわかり、  
避難経路など地域の  
防災活動に役立てられます



先人の記録を今に生かす

## 九州の 災害伝承



お問合せ先

一般社団法人 九州地域づくり協会

〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2丁目10-35 博多プライムイースト 4階

電話：092-476-5680 FAX：092-481-3785

九州災害履歴情報

検索

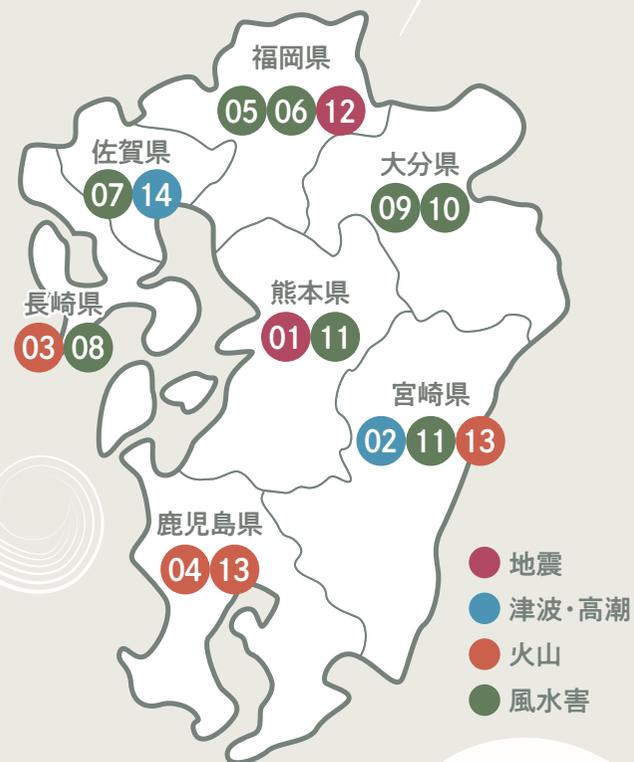


第三版発行 (R7.5)

# 目次

## エピソード

- 01 熊本地震  
明治時代にも起きていた「熊本地震」 1
- 02 外所地震津波  
50年ごとに1基ずつ建てられる供養碑 3
- 03 雲仙岳噴火・地震  
日本最大の火山災害「島原大変肥後迷惑」 5
- 04 桜島大正大噴火  
毎年「大正噴火の日」に防災訓練を実施 7
- 05 筑後川大水害  
暴れ川「筑紫次郎」の昭和28年大水害 9
- 06 九州北部豪雨  
豪雨時に繰り返す耳納山麓の土石流災害 11
- 07 子年の大風（シーボルト台風）  
有田の街並みを一変させた台風 13
- 08 土砂災害  
災害伝承で自主避難した長崎大水害 15
- 09 大雨、洪水  
人助けのムクの木 17
- 10 大雨  
悲しい伝説の残る小倉の池 19
- 11 豪雨  
豪雨災害の記憶をつなぐ記念碑 21
- 12 福岡県西方沖地震  
日頃の防災活動が地震後の火災を防いだ玄界島 23
- 13 新燃岳 享保・平成大噴火  
新燃岳噴火を後世に伝える「百人の記録」 25
- 14 台風に伴う高潮  
高潮から家や田畑を守った潮塞観音 27



## 明治時代にも起きていた「熊本地震」

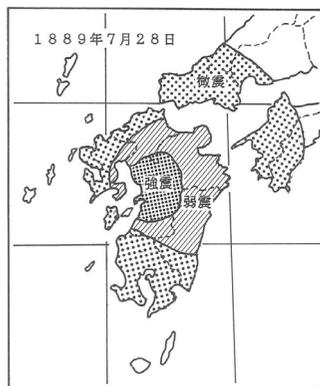
### 激しい直下型地震が明治の熊本中心部を襲った

1889年(明治22年)7月28日、熊本県西北部を震源とするマグニチュード6.3の直下型地震が発生しました。

熊本市を中心に半径20kmの範囲、特に金峰山の山麓で被害が大きく、死者20名、負傷者54名、全壊家屋239戸、半壊236戸、熊本城では石垣が崩れる被害がありました。

地震から数時間が経過したあとも震動と轟音は続き、家に入るのを恐れた人々は地面におしろを敷き、畳を持ち出して一夜を明かしました。ランプや提灯の明かりを灯し、人々は余震におびえながら、朝が来るのをひたすら待ち続けました。

下の写真は、熊本地震発生後の避難状況を撮影した貴重な一枚です。



熊本地震(1889年)の震度分布図

出典: 熊本市震災対策基礎調査報告書  
(S63年3月)



熊本市唐人町仮小屋之景

資料: 宮崎雅徳氏 提供

### 127年ぶりに発生した「平成28年熊本地震」

熊本県熊本地方を震源として2016年(平成28年)4月14日(木)と16日(土)に発生した「平成28年熊本地震」は、同一地域で震度7の激しい揺れが2回連続で発生した、観測史上初の直下型地震でした。さらに、震源から離れた地域でも大規模な誘発地震が発生するなど、過去に例をみない地震が起きました。

震源地に近い熊本市、益城町、西原村、南阿蘇村を中心に、家屋倒壊や土砂災害などによる死者は161名、重傷者1,087名、軽傷者1,605名と甚大な被害が発生しました。(内閣府:2016年12月14日時点)

住宅の被害は13万棟以上に及び、約20万人以上の方々が避難生活を強いられました。熊本地震は余震が2千回以上と多く、余震が怖くて家に帰ることができない多くの避難者が車中泊・テント泊を強いられました。

深刻な課題となったのが長時間、同じ姿勢で座り続ける「車中泊」であり、肺に血栓が詰まる「エコノミークラス症候群」で何人もの方が亡くなりました。

直下型地震は、いつでもどこでも起きる可能性を秘めています。常に地震への備えを考えておく必要があります。



斜面崩壊(阿蘇大橋地区)



重要文化財被災(熊本城)

## 50年ごとに1基ずつ建てられる供養碑

### 九州最大級の地震と津波が襲った

江戸時代の1662年(寛文2年)10月31日、宮崎市をマグニチュード7.6の日向灘地震と大津波が襲いました。

宮崎県内では震度5以上の揺れがあり、高さ4~5mの津波が宮崎県から鹿児島県大隅半島(おおすみ)まで襲ったと伝えられています。

特に飢肥藩(現在の宮崎市大字熊野周辺)を中心に被害が大きく、延岡、高鍋、佐土原、飢肥の城で石垣が崩れ落ち、3,800戸の家屋が倒れ、200人が亡くなりました。

この時、海寄りにあった外所村(とんどころ)では1mほど地面が沈み、そこへ津波の海水が流れ込んで村全体が海中に沈みました。外所地震の名前は、海に飲み込まれた村名にちなんでいます。

外所村があった宮崎市大字熊野地区には、7基の供養碑があります。

外所地震と津波の被害を後世に語り伝え、防災の戒めとするため、江戸時代から50年ごと(1世代)に供養碑を1基ずつ建ててきました。



供養碑(右から50年忌~350年忌)

供養碑は右側が一番古く、1761年(宝暦11年)や1810年(文化7年)の年が刻まれた石碑もありますが、風雨にさらされて文字は読み取れません。

一番左側の2007年(平成19年)の350年碑には「防災の大切さを後世に伝える」と刻まれ、今も地域の人たちが7基の供養碑を大切に守り、防災活動の教訓にしています。

### 白ウサギが津波を跳ねのけた伝説

外所地震(とんどころ)の伝承は宮崎市新別府町(しんべっぶちよう)の一葉稻荷神社(ひとつばいなり)にも残っています。

外所地震がおこった時、この地域一帯に大津波が押し寄せ、津波の被害にあいました。

その時、一葉稻荷神社に一羽の白ウサギが現れ、津波を蹴って神社を救ったという伝説があります。以来、白ウサギは「災害からの守り神」とあがめられ、御本殿の裏側に貴重な彫物として今も残されています。

古来より白い動物は、災害が起こる前ぶれのシンボリックなものとして扱われてきました。一葉稻荷神社の「木彫りの白兔」は現代に外所地震の被害を伝える貴重な史料となっています。

南海トラフ巨大地震が発生すると、宮崎県の一部では震度7となる可能性があるほか、太平洋沿岸の広い地域に10mを超える大津波が来ると想定されています。日頃から充分な避難対策を考えておく必要があります。



ひとつばいなり  
一葉稻荷神社の本殿



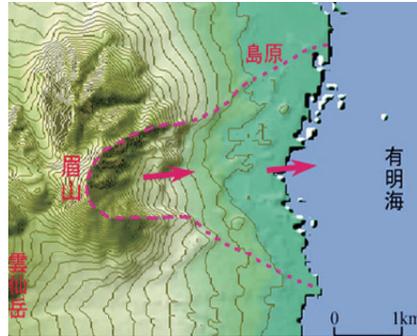
とんどころ  
外所地震の伝承「木彫りの白兔」

# 日本最大の火山災害「島原大變肥後迷惑」

しまばらたいへん ひごめいわく

## 雲仙岳の噴火による大津波が熊本沿岸を襲った

1792年(寛政4年)5月21日夜、長崎県島原半島の雲仙岳が噴火しました。噴火後、マグニチュード6.4の地震が発生し、眉山(標高700m)が崩れ落ちました。眉山の土砂は有明海に土石流となって一気に流れ込み、波高10~20mの大津波がおきました。津波は対岸の熊本(肥後)沿岸部に大きな被害を与え、折り返した津波が再び島原を襲いました。



雲仙岳・眉山の巨大崩壊位置図  
出典：独立行政法人 防災科学技術研究所HP

津波は3回起こり、波の高さは島原で33~55m、熊本県の天草で5~45mと想定され、津波による死者は有明海全域で約1万5千人(うち、約3分の1が熊本側)に及びました。島原の噴火・地震・土石流被害が「島原大變」、熊本の津波被害が「肥後迷惑」と呼ばれる有史以来日本最大の火山災害となりました。



肥後国嶋原津波之絵図(熊本大学永青文庫蔵)  
出典：国土交通省九州地方整備局 長崎河川国道事務所HP

## 島原藩主が建立した津波被災者の供養塔

島原大變の翌年、1793年(寛政5年)、島原藩主の松平忠馮は、死者が多く打ち上げられた海岸に、同形・同碑文の供養塔を7基建立し、流死した人の霊を弔いました。



南島原市西有家町の供養塔

供養塔の正面には「流死菩提供養塔」、右側面には「寛政四千年四月朔日高波」と刻まれ、現在も近隣住民による清掃・献花・供水などの供養が続けられています。



南島原市南有馬町の供養塔

## 熊本側の大津波の教訓を伝える石碑

熊本市河内町(旧河内村、白浜村、船津村)では、大津波により約500人が死亡したと伝わっています。大津波の教訓を伝える石碑は同町の船津厳島神社近くにあり、幅40cm、高さ2mほどの角柱4面にわたり碑文が刻まれています。

碑文には「後世に同じような津波が襲ったときは、すべてに優先し、高齢者や幼児を連れて直ちに避難しなければならぬ。迷わないように普段から逃げ道を確認しておくべきだ」と記されています。

災害を自分のこととして受け止め、しっかりと避難できるように日頃から準備しておくことが大切です。



前面道路から見た位置  
神社東参道入口にあったが  
道路改良で現在地に移設



津波教訓碑  
寛政7年乙卯10月建立

## 毎年「大正噴火の日」に防災訓練を実施

### 大正噴火の溶岩流で桜島が大隅半島と陸続きに

活火山の桜島では日常的に噴火が起こっていますが、1914年(大正3年)1月12日には噴煙が上空8,000mまで達する大爆発が起こりました。30億トンの溶岩が流れ出し瀬戸海峡(幅300~400m、深さ70~80m)は埋没、桜島と大隅半島が陸続きになるほどの大噴火でした。

桜島の各集落には135年前の安永噴火の言い伝えが残っており、大正噴火では危険を察知した住民が自主的に避難しました。

このため、大正噴火は大噴火でありながらも犠牲者が少なかったのです(安永噴火の犠牲者は153名に対し、大正噴火の犠牲者は58名)。



大正噴火の様子

出典:「桜島大正噴火100周年記念誌」  
桜島大正噴火100周年実行委員会  
鹿児島県(2014年発行)

### 火山灰で埋まった神社の鳥居

腹五社神社の約3mあったと言われる鳥居は、噴火後1日のうちに軽石や火山灰に埋め尽くされ、現在は笠木部分の約1mだけが地上に出ています。



黒神埋没鳥居(鹿児島市黒神町)

牛根麓稻荷神社の約3.7mあったと言われる鳥居は、軽石・火山灰によって完全に埋没しました。それを掘り出し、現在は高さ約1.45mだけ地上に出ています。



牛根麓稲荷神社の埋没鳥居

### 高い防災意識をもって生活する桜島の住民

いつ大噴火が起こるかもしれない桜島では、大噴火時の応急対策が素早く適切に行われるよう、「大正噴火の日」1月12日頃に『桜島火山爆発総合防災訓練』を毎年実施しています。

退避壕や砂防ダムなどの施設整備も進められており、桜島の住民は日頃から高い防災意識をもって生活しています。



桜島火山爆発総合防災訓練の様子  
画像出典: 鹿児島県HP



島内に32基の退避壕を設置

## 暴れ川「筑紫次郎」の昭和28年大水害

### 久留米市内の80%が浸水した筑後川の大水害

熊本県、大分県、福岡県、佐賀県の4県にまたがる九州最大の筑後川は「筑紫次郎」注と呼ばれる暴れ川として恐れられてきました。

筑後川流域では1573年(天正元年)から1889年(明治22年)までの316年間に183回の大水害がありました。約1.7年に1回の割合で水害が起きています。

明治以降は近代的改修が進められましたが、まだ水害は頻繁に起きています。特に被害が大きかった明治22年、大正10年、昭和28年の水害は「筑後川3大水害」と呼ばれています。

なかでも1953年(昭和28年)6月の豪雨被害は大きく、25日から30日に至る5日間の連続雨量は筑後川上流部で960mm、中流部で700mm、下流部で600mmを記録しました。

筑後川の堤防は122箇所が壊れ、朝倉堤防は延長約600mにわたって決壊しました。

(注)日本三大暴れ川の一つ  
坂東太郎(利根川)、筑紫次郎(筑後川)、四国三郎(吉野川)

久留米市では、東櫛原町など数か所で堤防が決壊し、東・西・北の三方向から一挙に市内に濁流が流れ込みました。

決壊した堤防から流出した水は久留米市内に押し寄せ、かつての国鉄久留米駅、久留米大学医学部など久留米市中心部をことごとく水没させ、市内の80%が浸水しました。



久留米大学医学部付近の浸水状況

画像出典：国土交通省 九州地方整備局

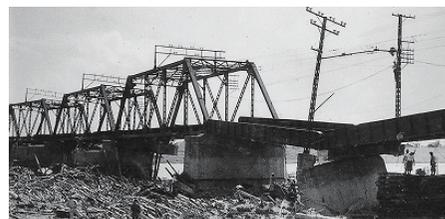
筑後川流域内の被害は、流出全半壊家屋約12,800戸、床上浸水家屋約49,200戸、床下浸水家屋約46,300戸、被災者数約54万人、死者147人に達する悲惨な災害でした。

この大水害により、流域の広大な耕地は流失、埋没、冠水などの大きな被害を受けました。



決壊した宮の陣の堤防

画像出典：国土交通省 九州地方整備局



久留米市宮の陣川が大量の流木で破壊

画像出典：NPO法人 筑後川流域連携倶楽部



久留米市の篠山城下は濁流の海、米軍プロペラ船で救助される人々

画像出典：NPO法人 筑後川流域連携倶楽部

### 洪水の水深と同じ高さの「石柱モニュメント」

久留米市中央公園内に建つ「昭和28年筑後川水害記念碑」の碑文には「この中央公園付近にも濁流が押しよせ、その水深は、この記念碑の頂部にまで達した。」と刻まれており、周囲の路面から約4.45mの高さまで浸水したことが分かります。この記念碑には「大いなる自然の恵みを与え続けてくれる筑後川が、時として自然の脅威と化する事を後世に伝え、筑後川治水百年の大計を果たすことを誓う」と書かれています。

記念碑として過去の災害記録を残していくことで、日頃から水害に充分警戒し、いち早い避難活動が必要だと人々に伝えていきます。



昭和28年筑後川水害記念碑

資料：高橋和雄氏提供

## 豪雨時に繰り返す耳納山麓の土石流災害

### 土砂に埋まった大村の歴史を刻む復興碑

福岡県うきは市は、筑後川とその支流の巨瀬川、隈上川が流れ、毎年のように洪水に見舞われてきました。また、南側に急峻な耳納山地があり、その山麓では大規模な土石流災害が繰り返し起こってきた歴史があります。

多くの犠牲者を出した1720年(享保5年)の「享保5年7月九州北部豪雨」は、江戸時代に起こった筑後最大の災害で、耳納山麓では山崩れ7,737ヶ所、死者は61人、負傷者32人に達しました。また、土石流が巨瀬川の氾濫を誘発し、大村全域が土砂で埋没しました。

うきは市吉井町の大村天満宮境内に立てられている「大村復興碑」には、享保5年7月の豪雨による土石流で大村が土砂に埋まったこと、この災害で巨瀬川に土砂が堆積したため、降雨のたびに氾濫し大村の復興は困難を極めたことが記されています。

昭和7年、ついに復興事業が完成したことを記念し、この復興碑が建てられました。

巨瀬川は今でも氾濫・決壊の危険性があります。日頃から災害と向き合うことによって安全な避難ルートなどを考えてみましょう。



大村復興碑(うきは市吉井町大村地区)

### 300年前の教訓を伝える伝承碑

耳納連山の傾斜地を利用した柿畑が広がる、うきは市吉井町東屋形には、「儲穀」と書かれた石柱がひっそりと立っています。

隙間なく文字が彫られていますが、今ではほとんど読めない状況です。

石柱の碑文には「享保年間、この村は山崩れによって水はあふれ、田は砂や石で埋まった。被害の大きかった12人は租税を免じられたので、食べるに困ることはなかったが、不慮の災厄に対しては日頃の備えが肝要なので、村長は一同と相諮り穀物を備蓄すること

とし、以来25年間、寛政6年(1794)までに77石あまりの穀物を備えた。」と災害を教訓に食料を備蓄したことが記されています。

石柱に残してまで子孫に伝えようとした教訓は、現代でも十分通用するものです。

このように記念碑が建てられている場所では、また同じ災害が起きる可能性があると考えて、来るべき災害に備えることが大切です。



儲穀の石柱(うきは市吉井町東屋形)



## 有田の街並みを一変させた台風

### 死者1万人を超える史上最大級の台風

1828年(文政11年)9月17日に大暴風雨に見舞われた肥前国内では、一夕にして1万人を超える死者を出し、多くの家屋が倒壊、流出、焼失するなど甚大な被害をもたらしました。日本付近を襲った台風としては史上最大級であったとも言われています。

佐賀県嬉野市にある丹生神社の大鳥居は、柱の第一石を残して倒壊してしまいました。この倒壊した石材が鳥居脇に積み上げられており、台風の凄まじさを物語っています。



川上丹生神社

この年の干支が子年だったことから、地元で「子年の大風」と呼んで後世に伝えていきます。

また、シーボルトが出帆予定としていたところ、この大暴風が長崎を直撃した際、船が稲佐浜辺に打ち上げられ、積み荷の中に国禁の資料が発見された、いわゆるシーボルト事件の発端になったともされていることから、「シーボルト台風」とも呼ばれています。



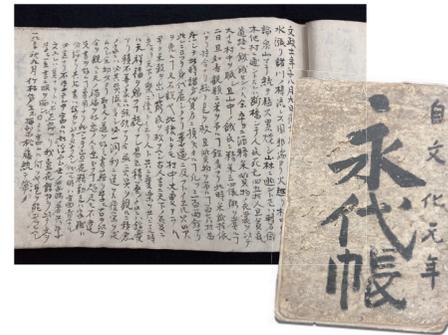
石造りの鳥居が倒れたまま残されている

### 台風によって引き起こされた有田の大火

この台風の猛烈な風により、「有田の大火」が引き起こされています。焼き物で有名な有田町では、岩谷川内の窯から出た火が風にあおられ、泉山までの地区の大半を焼き尽くしたと言われています。

この火災で亡くなった人は40~50人と言われ、かろうじて逃げ果せた人々が嵐が静まってから戻ってみると、そこは一面の焦土と化していたそうです。

眼前に広がる光景を見た当時の方を想うと胸が痛みます。



大火事について記されている「永代帳」  
資料：有田町歴史民俗資料館 提供



発掘調査の際に確認された文政11年大火の焼土層  
資料：有田町教育委員会 提供

### 災害に備えた家づくり

このような災害を経験した有田町の内山地区の建物のほとんどは、「有田の大火」のあとに建てられたもので、災害の教訓を活かした様々な工夫が見られます。

明治時代に活躍した商人、松本庄之助が建てた「松本家住宅」もその一つです。昔の蔵のような建物ですが、浸水対策として家の基礎が地上1m、地下1mととても高くつくられています。

また、火事への対策として壁には燃

えにくい「漆喰」が塗られており、家の周りを庭や空き地にすることで火事になった時、周りに燃え移らないようにしています。

さらに、災害時に住民が集まって食事の準備やお風呂を利用できるよう、入口の土間や台所、お風呂をととても広く作っています。

災害による経験を踏まえ、街で一体となって被災時を見据えた対策に取り組んでおり、防災意識の高さが伺えます。

## 災害伝承で自主避難した長崎大水害

### 150年以上続く災害伝承「念仏講まんじゅう」

長崎県長崎市太田尾町の山川河内地区は、3方を山に囲まれた山村集落です。江戸時代末期の1860年(万延元年)5月29日、大雨による土砂災害が発生し、7戸の家屋が全半壊、33人が亡くなりました。

集落全体に壊滅的な被害を与えたこの災害が、人々に与えたダメージは大変大きいものでした。それ以来、この地区では、災害で亡くなられた方々の供養と被害を忘れないため、遺体の捜索を打ち切った翌日の14日を月命日

として、毎月14日に「念仏講まんじゅう」を地区の全世帯に配るという行事が行われるようになりました。

各家庭では受け取った2つのまんじゅうを仏壇に供え、念仏を唱えた後に家族で分け合って食べます。その際、まんじゅうの由来や災害の心構えが、子供たちや地区の外からきた新しい家族に伝えられています。

この取り組みは、今なお150年以上の間、地区の全世帯が持ち回りで続けています。



山川河内地区



万延元年に土石流が発生した地区

出典：災害伝承「念仏講まんじゅう」調査報告書(H25.7)

### 災害伝承が住民の命を救った

毎月行われているこの「念仏講まんじゅう」という風習ですが、長い時を経る中で「時代に合わない」と存続が危ぶまれたこともあったそうです。

しかし、「まんじゅうを渡す」というかたちで災害の教訓を伝えてきたおかげで、1982年(昭和57年)7月23日の長崎大水害<sup>注</sup>)を逃れることができました。

長崎市を中心とした集中豪雨による災害で、隣接する長崎市芒塚地区では土石流等により17人が亡くなりました。

山川河内地区でも河川氾濫や土石流が発生し、家屋等に被害がありましたが、住民は早めに安全な高台に自主避難し、35世帯173人のうち、一人の負傷者も出ませんでした。

1週間後、救助に訪れた人たちは、大きな被害に会っているのにもかかわらず、怪我人さえ出なかったことに驚きの声を上げたといいます。

「念仏講まんじゅう」の由来や災害の心構えを語り継ぎ、「二度とこのような災害による犠牲者を出さない」という自主防災の意識が住民の間に脈々と伝えられています。現在住んでいる地域の災害の歴史を紐といてみることも、防災教育の一つと言えるでしょう。

#### (注)長崎大水害

「昭和57年7月豪雨」のこと。7月23日夕方から、長崎市付近で局地的に1時間100mmを超える猛烈な雨が3時間以上降りつづき、死者・行方不明者299人、住家被害3万9755戸、がけ崩れ4306カ所、地すべり151カ所という大きな被害をもたらした。



まんじゅうを手渡しで全戸に配る「念仏講まんじゅう」

山川河内地区で続けられている風習を自治会長の山口辰秋さん(右)と川端綾子さん(左)が再現  
出典：ミツカン水の文化センター 再考防災文化HP



長崎大水害後の山川河内地区

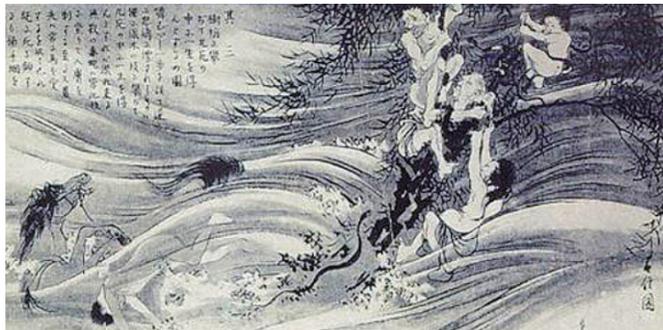
出典：ミツカン水の文化センター 再考防災文化HP

## 人助けのムクの木

### 集中豪雨による洪水が筑後川沿線を襲った

1889年(明治22年)7月4日早朝より筑後川流域一帯に降りだした雨は5日午前10時頃までにはその大部分が振り終わっており、久留米ではその時の連続雨量が184.1mmに達したとされています。この雨は筑後川流域及びその周辺に特に豪雨をもたらしたとされ、水位は2丈8尺4寸5分(8.62m)にまで達しています。

この洪水による被害は、死者が日田で18名、久留米で52名。家屋被害が日田で8,460戸、久留米で48,908戸にのぼり、後に「筑後川3大洪水」に数えられるほど甚大な被害をもたらしました。



明治22年7月豪雨の水害絵図

また、1921年(大正10年)6月16日に揚子江流域に発生した低気圧は東進するに従って発達し、北九州を猛雨が包み込み、洪水を引き起こしました。この洪水も明治22年と並ぶ「筑後川3大洪水」の一つであり、家屋被害が11,620戸にも及び、甚大な被害が出ました。

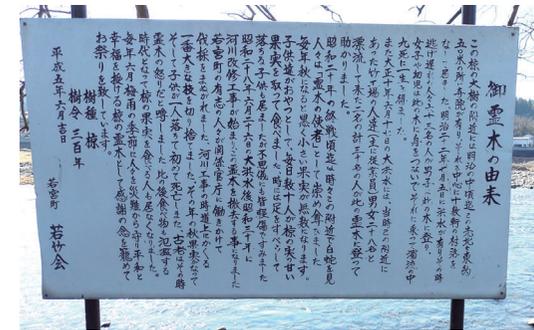
当時の様子を記した水害誌(八女郡)大正10年)には、「6月17日前代未聞の大洪水を招き、矢部川星野川両流域に亘る二十一ヶ町村は、突如暴戾なる氾濫の害を受けて、橋梁住宅の流失、堤防堰塘の決潰田畑林野の荒廢其他人畜の死傷等各地挙て数ふ可からず。」と記されており、被害の凄まじさを物語っています。

### ムクの木によって救われた命

日田市の中心を流れる三隈川の川沿いに、高さ25m、樹齢三百年にもなる立派なムクの木が立っています。

このムクの木は、先程の2度の洪水の際、その濁流にも負けずに立ち続け、水害から人々の命を救ったという記録が残されています。

明治22年7月洪水では逃げ遅れた63名が、男子は木に登り、女子や幼児は木に舟をつないで濁流の中九死に一生を得ました。大正10年6月の大洪水では、付近にあった竹工場の人達28名と漂流してきた2名が木に登って助かったそうです。



霊木の足元に建てられた看板には、2度の洪水で救われた人々の当時の様子などが記されています。

### ムクの木への感謝と災害の伝承

このムクの木に命を救われた人達や、地域の有志の方々によって地蔵堂が建てられ、霊木として保存されるようになりました。

地元住民の方々で作る「棕の木保存会」の皆様は毎年神事を開き、感謝を述べているそうです。

こういった取組を続けることで、災害の恐ろしさを伝えるとともに、地域の防災意識の向上にもつながっています。



川のほとりにそびえ立つムクの木

## 悲しい伝説の残る小倉の池

### 十数年ぶりの大雨で堤防が決壊



宇佐市最大の大きさを誇る「小倉の池」 資料：横山地区まちづくり協議会 提供

江戸時代の初期、1606年（慶長11年）に建設された小倉の池は、宇佐市の中でも最大の大きさを誇っており、農業用水保全など、地域に住む人々の暮らしを守ってきました。

老朽化に伴い、1985年（昭和60年）に改修工事が行われたこの小倉の池にまつわる伝説をご紹介します。

1605年（慶長10年）、当時の領主細川忠興は、領内巡視の際に干害に悩む農民たちの姿を見て、巨大なため池を造ることを家臣たちに命じました。

莫大な費用と数千人を使い、百数十日の苦勞の末、ようやく完成しました。

これで干害の心配はないと村人たちは大喜びでした。

しかし、それも束の間のこと、翌1606年（慶長11年）の夏に十数年ぶりの大雨があったさい、大堤防は根元から崩れてしまい、池の水は田畑にあふれ、稲も作物もすべて押し流されてしまいました。

ただ呆然としている農民たちに庄屋はどんなときにも崩れないような立派なため池を子孫のために造るべきだと励ましました。皆が集まって相談し、この上は人柱を立てて神仏の力を借りるよりないという事になりました。

### 村のため一人の女性が命を投げうった

この時、元重村の久良という40歳前後の親も子もない一人の女性が庄屋を訪ね、何かと世話になった村人に恩返しをしないと人柱に立つことを願い出ました。

願いを許された久良は、伊呂波川の流れて身を清め、神に祈り、1ヶ月の齋戒沐浴を終え1606年（慶長11年）9月10日純白の衣に身を包み、多くの部落民が見守る目前で犠牲となりました。

その誠が神に通じたのか、数百メートルの大堤防も日ならずして完成、農民は今日までその恩恵に浴しています。

このため、池の畔に祠を建立し、池守明神として祭り彼女の名をとり「小倉の池」と称したといわれています。



池のほとりには池守明神を祀る祠が建つ

### 伝説として語り継がれる

この勇敢な彼女を称え、関係自治区主催で「おくらさんの追悼供養祭」が毎年8月に執り行われています。

また、小倉の池にほど近い横山小学校の校歌には、彼女に関する内容が含まれており、今後も子どもたちによって歌い、語り継がれていくことでしょう。



おくらさんの追悼供養祭の様子

資料：横山地区まちづくり協議会 提供



横山小学校の子ども達が紙芝居を作り伝説の語り部を体験  
資料：横山地区まちづくり協議会 提供



小倉の池は水清く  
我が村を水そそぎ  
伝説秘めし人柱  
学ぶ誇りのあゝ母校  
母校母校我が母校

横山小学校校歌より

出典：宇佐市立横山小学校校歌

## 豪雨災害の記憶をつなぐ記念碑

### ひさつ まさき やまつ なみ JR肥薩線真幸駅ホームに残る山津波記念石

1972年(昭和47年)7月3日より、梅雨前線に伴った局地的な大雨が連日九州と四国を襲いました。宮崎県えびの市の熊本県境付近では総降水量が600mm以上に達しました。

7月6日、豪雨により宮崎県えびの市内竪にある現JR肥薩線真幸駅の裏山8合目付近で地すべり崩壊が起こり、5回の土石流(山津波)が発生しました。高さ350m、幅280mに渡る土石流により、30万 $m^3$ もの土砂が真幸駅から下に流れ出し、住家28戸、非住家29戸が埋まって4名が亡くなりました。

この土石流は今でも宮崎県最大規模のものです。

被災後、真幸駅と線路は復旧されましたが、被害を受けた世帯はすべて移転したため、駅周辺に人家がない「秘境の駅」になってしまいました。

当時の駅長は後世に伝える「災害記念」として、スイッチバック線ホームに取り残されていた推定重量8トンの岩石をそのまま残し、説明板を設置しました。このように過去の災害の記録を残していくことで、風水害に充分警戒し、いち早い避難が必要だと人々に伝えています。



崩壊地と流出土砂  
出典：宮崎県HP(えびの市所蔵)



山津波で流れ出た約8トンの岩石と説明板

### 約2メートルの高さまで浸水したことを示す標柱

熊本県上天草市松島町教良木地区の教良木河内出張所と、隣接するJAの駐車場内には、7月6日の豪雨被害を示す遺構が残っています。

教良木河内出張所前の駐車場内にある「災害復旧記念碑」には、『昭和47年7月6日正午突然の集中豪雨は時間降雨量120ミリに達し山腹に山津波が生じ未曾有の大水害が発生した。』

特に教良木大河内地区、今泉地区が被害甚大で、交通、電気、通信は寸断され死者3名、住家の全壊47戸、半壊181戸、浸水家屋589戸、道路、橋梁、河川、水路、溜池、堰の決壊流失約90ヶ所、田畑の流失埋没90ヘクタール、被害総額40億円に及び、瞬時にして惨状を呈し大混乱に陥った。』と被害の状況が書かれています。



出張所内にある「災害復旧記念碑」

JA前の「天草上島大水害水標柱」には、当時の浸水深さが刻まれており、周囲の路面から約2mの高さまで浸水したことが分かります。

これらの風水害被害を身近な石碑で伝えることにより、日頃から風水害への対応を行うことや危機意識を持つ心構えが必要です。



天草上島大水害水標柱

日頃の防災活動が  
地震後の火災を防いだ玄界島せいほうおき  
福岡県西方沖地震の発生

2005年(平成17年)3月20日10時53分頃、福岡県西方沖を震源とするマグニチュード7の地震が発生しました。福岡市では震度6弱、福岡市西区の玄界島では、震度5強が観測されま

した。玄界島では多くの建物が被害を受け、島内の住宅の約7割にあたる153棟が全壊または半壊しました。また、この地震で10人が重傷、9人が軽傷を負いました。

## 日頃の防災活動が火災を防いだ

玄界島は、福岡市から船で約30分の距離にある漁業が盛んな島です。島には平地が少なく、住宅は斜面に密集して建てられています。このような環境では、一度火災が起きると大きな被害につながるため、初期消火が非常に重要になります。しかし、島内には消防署がなく、また昼間は男性の多くが漁に出ているため、島に残る女性や子供た

ちが地域を守っていました。地域の婦人部が主体となった防火クラブや中学生全生徒による少年少女消防クラブが結成され、2カ月に一度防災訓練が行われていました。

西方沖地震が発生した日も、漁師たちはいつものように漁船に乗り沖合へ出ていましたが、10時53分頃、突然船を突き上げるようなショックを感じて、急



倒壊した家屋  
出典：福岡県西方沖地震記録誌



災害復興記念碑(R7.3撮影)

いで島へ戻りました。島では防火クラブのメンバーがすぐに避難を呼びかけ、小学校などの避難所で住民の安否確認を行い、行方不明者の捜索や救助を行いました。また、各家庭ではガスの閉栓や電気のブレーカーを落とし、火災の発生を防ぎました。

多くの住宅が全壊や半壊などの壊滅的な被害を受けたにも関わらず、地震後の火災が1件も発生しなかったのは、火を使う時間帯でなかったことに加え、日ごろの火災に対する備えの効果と考えられます。

## 地域一体で取組む災害に強いまちづくり

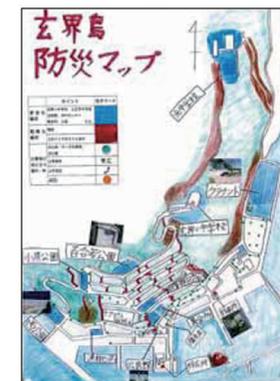
地震から約1か月半後の2005年(平成17年)5月7日、玄界島の住民による「玄界島復興対策検討委員会」が発足し、地域をまとめるリーダーのもと復興の基本方針が短期間でまとめられました。わずか3年後の2008年(平成20年)3月には復興事業が完了し、住民の避難生活は解消されました。

玄界島には、復興記念碑のほか、復興を目指す島民を励ますために天皇后両陛下が詠まれた詩を刻んだ石碑が建てられています。

福岡市では西方沖地震が発生した3月20日を「市民防災の日」と定め、被災から20年が経過した現在も毎年防災訓練を行い、地域防災力の強化に取り組んでいます。



防災訓練の様子



小学生が作成した「玄界島防災マップ」

島内の小学生が作成したものです。玄界島では、福岡県西方沖地震を経験して、小学生も防災マップを作成するなど地域一体となって、災害に強い街づくりに取り組んでいます。

出典：福岡市消防局予防課資料



天皇后両陛下の詩が刻まれた石碑  
資料：玄界島地域おこし協力隊提供

しんもえだけ  
新燃岳噴火を後世に伝える「百人の記録」

しんもえだけ  
約300年ぶりの新燃岳大噴火

鹿児島県と宮崎県の県境にある霧島山新燃岳では、2011年（平成23年）1月26日に激しい噴火が始まりました。宮崎県高原町では火山灰や火山礫が降り積もり、火山雷も発生しました。学校では降灰のため教室や体育館、運動場が使えなくなり、日常生活に大きな影響を与えました。避難勧告も出され、住民たちは火砕流や土石流が起きるのではないかと不安な日々を過ご

しました。2月1日にはさらに大きな爆発的噴火が約300年ぶりに起こり、火口から3.2km離れた場所にも火山弾が飛び、山林火災が発生しました。鹿児島県霧島市では、噴火の衝撃波（空振）で窓ガラスが割れ、ケガ人が出る被害もありました。

2011年の噴火では、軽石や火山灰が2,500万トン、火口内の溶岩が2,500万トン、合計5,000万トンのマグマが約1週間で噴出するなど、非常に大規模な噴火でした。しかし、江戸時代に起きた享保の大噴火では、さらにこの数倍のマグマが噴出したと考えられています。



新燃岳噴火 資料：高原町提供



火柱と火山雷 資料：高原町提供

きょうほう  
江戸時代に起きた享保の大噴火

1716年（享保元年）2月18日に突然噴火が始まり、9月26日には宮崎県小林市にある霧島中央権現宮が焼失し、境内には約180cmもの火山灰や石が積もりました。非常に大きな火柱が上がって狭野神社の上空を覆い、火石が雨のように降ったという記録も残っています。

噴火は一時的に落ち着きましたが、12月28日の夜から再び噴火が起こり、霧島東神社や花堂集落が焼失しました。翌年の1717年（享保2年）1月3日にも大噴火があり、大量の火山灰や火山雷が周囲の町を襲いました。この噴火で高原町後川内地区の大半が焼失したと伝えられています。

百人の記録

2011年の噴火でも、江戸時代の噴火でも、新燃岳の近くに住む人々は避難を強いられ不安で不便な生活を経験しました。

この経験を風化させないようにと、高原町では2011年11月に「新燃岳噴火百人の記録」を作成しました。この記録には、高原町の小・中・高校生、教

職員、保護者、地域の人々など100人が書いた体験記が収められています。高原町では、毎年1月26日を防災教育「新燃岳を考える日」として制定し、道徳や学級活動の時間に「百人の記録」にある作文を用いて防災意識を高めたり、命を守る防災行動について理解を深めています。



住民100人の作文が掲載されている「百人の記録」 資料：高原町提供



表  
裏  
新燃岳噴火の碑 資料：高原町提供

## 高潮から家や田畑を守った潮塞観音しおどめかんのん

### 高潮が町を襲った

有明海に近い佐賀県白石町は、昔から干拓により農地を広げてきました。干拓とは、海を堤防で仕切り、中の海水を抜いて土地をつくる方法です。このため、干拓によってできた土地は外の海面よりも低く、台風や高潮の被害を受けやすい場所でした。

1914年(大正3年)8月25日、大型の台風がこの地域を襲い、高潮が発生しました。堤防がいくつも決壊し、海水が町に押し寄せました。多くの若者や消防団が必死に堤防を修理しようとしたが、自然の猛威には逆らえず、町は水浸しになってしまいました。



由来が記された看板  
資料: 災害歴史を学ぶ会提供

水の勢いは衰えず、最も重要な堤防「五千間土居」も壊れかけていました。そんな時、どこからか小屋が流されてきて、ちょうど決壊しかけた部分を塞ぎました。その後、不思議なことに海水が静かに引いていったのです。

やがて台風が過ぎ去り、堤防を塞いだ小屋の中をみると、そこには千手観音像がありました。住民たちは、この観音様が千本の手を使って高潮を止めてくれたと感謝し、「潮塞観音しおどめかんのん」と名付け、土地の守り神として祀ることにしました。



潮塞観音  
資料: 白石町提供

### 伝説を後世へ伝える潮塞観音祭

潮塞観音の伝説を後世に伝えるため、福富地区の人々は観音像を祀るお堂を建て、その由来を記した看板を設置しました。また、もともと観音像があったとされる場所にも記念碑を建て、高潮から町を守った観音様への感謝を表しています。

1914年の高潮から100年以上が経ち、現在では有明海沿岸に頑丈な堤防が整備され、高潮の被害はほとんどなくなりました。しかし、福富地区の人々は台風が近づくと、風が強まる前に自主的に避難する習慣を大切にしています。

白石町では毎年8月25日に「潮塞観音祭り」を開催しています。この祭りでは、地域の子どもたちが伝統芸能で

ある「浮立ふりゅう」を奉納し、伝説を語り継ぐとともに、災害の恐ろしさや備えの大切さを学んでいます。

潮塞観音の伝説は、地域の歴史として語り継がれるだけでなく、防災意識を高める貴重な訓話となっています。



もともと観音像があった場所に建つ潮塞観音古跡  
資料: 災害歴史を学ぶ会提供



潮塞観音祭り  
資料: 白石町提供



子どもたちによる「浮立」  
資料: 白石町提供